

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 199



1988 JUNE

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

昭和63年度通常会員総会のお知らせ!!

日本ヒマラヤ協会昭和63年度通常会員総会を下記により開催いたします。

ご承知のように、総会は本会の最高意志決定機関でありますので、会員の皆様には万障繰り合せのうえ出席くださるようお願いいたします。

なお、やむを得ず欠席される場合は、定款の定めるところにより、委任状を必ず提出されるようお願いいたします。(委任状は、別途送付いたしました料金受取人払はがきをご利用ください。5月15日までに必着するようお願いいたします。)

記

1. 日時 昭和63年5月28日(土)午後1時00分
2. 場所 シチズン・ボール会議室
(東京都新宿区高田馬場4-27-29)
☎03-363-2211
(H A J ルーム前)

3. 議 事

- (1) 議案第1号 昭和62年度事業報告について
- (2) 議案第2号 昭和62年度収支決算について
- (3) 議案第3号 昭和63年度事業計画について
- (4) 議案第4号 昭和63年度収支予算について
- (5) 議案第5号 会員の除名について

4. その他

表紙写真

新都橋から川蔵南路に入り、高原に登ると、はるか北々東に針峰群が見えてくる。雪多山脈の峰々である。その後方には一きわ鋭くジャラ山がそびえていた。
(山森欣一)

ヒマラヤ No.199

1. 遥かなり、新青峰 — H A J 崑崙登山隊計画 —
7. 神の山、ゲニ峰 — H A J ゲニ峰登山隊計画 —
12. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・インフォメーション〉
17. U I A A 遠征委員会報告
22. 一枚の写真から ————— 山 森 欣 —
24. 寸感・事務局日誌

遥かなり新青峰

6,860 m

HAJ崑崙登山隊計画書

趣 旨

日本ヒマラヤ協会（HAJ）は、広範なヒマラヤ地域の登山・踏査・学術研究を実践するヒマラヤ愛好者で構成する全国組織の任意団体であります。創立以来、これまで20年間に、登山・踏査だけでも60数隊を派遣し、数多くの成果を挙げて参りました。また、これらの遠征を通じて、ヒマラヤ諸国との友好親善・相互理解も深めて参りました。

さて、この度、本会の活動の根幹ともいふべき未踏峰・未踏査地域をめざす隊として、HAJ崑崙登山隊を派遣することになりました。宝石を散りばめたように無数の湖水が点在する青藏高原の北、新疆ウイグル自治区と青海省の境に位置する東崑崙の秘峰・新青峰（6,860 m）が、目的の山です。

青藏公路を離れること約350 km、道無き青藏高原を約5日間の踏破（自動車）で、やっとBC予定地に着けるであろうという、まだまだ探検的要素の多い登山隊です。

1987年夏の偵察隊も、河の増水や悪路のため、BC予定地まで達することができませんでした。この結果、降雨量の比較的少ない4月末から6月中旬を派遣期間と決定致しました。山容はもちろん周辺の地形すら定かでない地域で、未知への憧れはいやがうえにも掻き立てられます。

私達は、この機会を最大限に活用して、新青峰

の初登頂のみならず、自然科学や人文科学上大いに興味をもたれるこの地域について、様々な成果をもたらすよう努力致す所存でございます。

何卒、本登山隊の趣旨をご理解の上、皆様の絶大なるご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

1987年12月

日本ヒマラヤ協会 HAJ崑崙登山隊実行委員会
会 長 遠 藤 登
隊 長 植 松 秀 之

計 画 の 概 要

1. 隊の名称
HAJ崑崙登山隊1988年
(英文名) HAJ KUNLUN EXPEDITION 1988
(略 称) HKE-88
2. 派遣母体
日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF
JAPAN (HAJ)
3. 目標の山
中華人民共和国・青海省と新疆ウイグル自治区の境
新青峰(XIN QING PEAK) 6,860 m 未踏峰
4. 目 的
 - ① 新青峰の初登頂
 - ② 青藏高原・東崑崙山脈の探検調査
 - ③ 中国登山界との親善交流

5. 登山期間

1988年4月22日～6月5日(45日間)

6. 隊の構成

隊長 植松秀之 隊員8名 医師1名

連絡官1名 通訳1名 コック1名 計13名

7. 推進の組織

日本ヒマラヤ協会崑崙登山隊実行委員会

会 長 遠藤 登 (H A J 会長代行)

副 会 長 稲田 定重 (同 専務理事)

委 員 長 植松 秀之 (同 理事・隊長)

事務局長 山森 欣一 (同 事務局長)

委 員 尾形 好雄 (同 常務理事)

“ 飛田 和夫 (同 常務理事)

“ 八木原 明 (同 常務理事)

“ 山田 昇 (同 常務理事)

“ 登 山 隊 員

8. 隊の事務局 (留守本部を兼ねる)

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1

淀橋食糧ビル506号

日本ヒマラヤ協会

(現地連絡先)

青海省登山協会

青海省西寧市南門外体育场

Tiyuchang Nanmenwai Xining,

Qing Hai, Province, CHINA.

TEL 76030

日 程 概 要

1988年4月22日(金) 成田→北京(飛行機)

23日(土) 北京→蘭州(飛行機)

24日(日) 蘭州→西寧(列車)

25日(月) 午前: 隊荷整理

午後: 西寧→黒馬河(青海湖畔)

26日(火) 橡皮山(4,452m)

高所順化トレーニング

27日(水) 黒馬河→西寧

午後: 隊荷整理

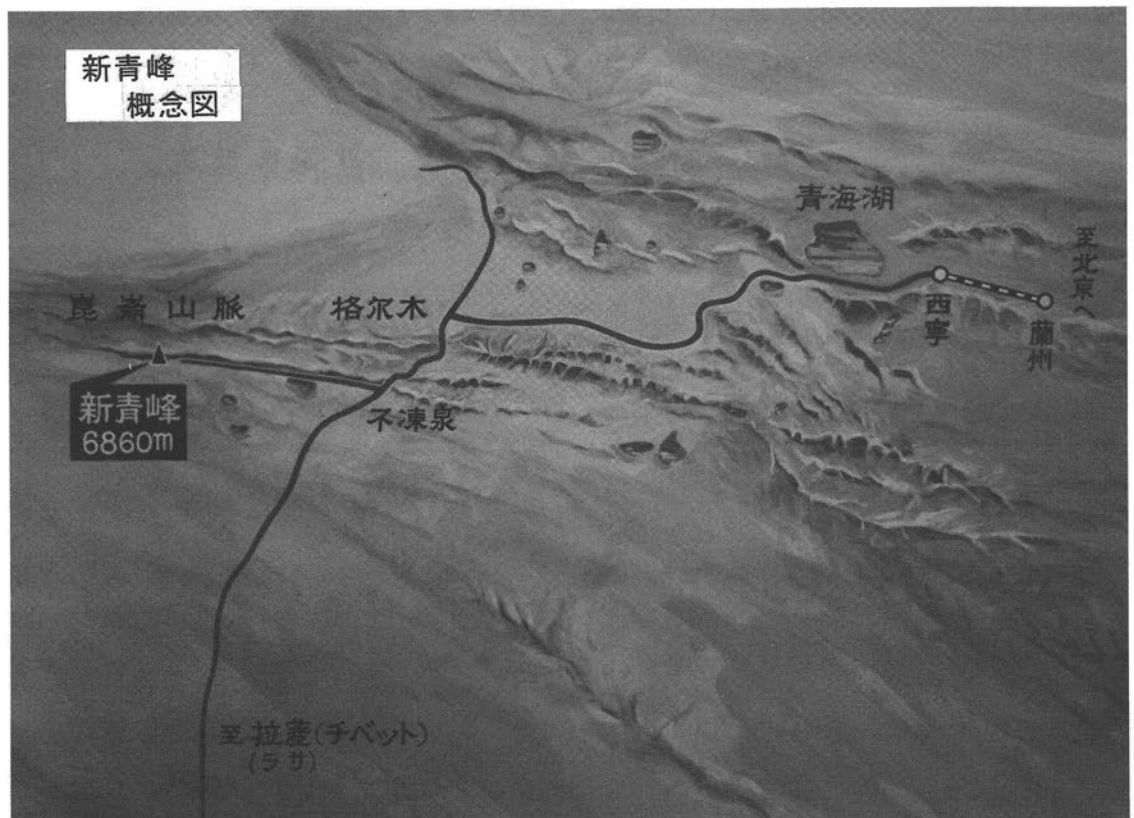
28日(木) 西寧→都蘭 428km (以後自動車)

29日(金) 都蘭→格爾木 354km

30日(土) 格爾木 滞在 出発準備

5月1日(日) キャラバン開始

格爾木→不凍泉



崑崙峠(4,750m)越え 180km

隊長:植松 秀之(Hideyuki Uematsu)

2日(月) 不凍泉→BCへ 350km

6日(金) BC建設 4,800m

7日(土) 登山開始

11日(水) C1建設 5,600m

15日(日) C2建設 6,200m

19日(木)~23日(月) 頂上アタック

25日(水) BC→格尔木へ

29日(日) 格尔木

30日(月) 格尔木→都蘭

31日(火) 都蘭→西寧

6月1日(水) 西寧 滞在 隊荷整理

2日(木) 西寧→蘭州(列車)

3日(金) 蘭州→北京(飛行機)

4日(土) 北京 滞在

5日(日) 北京→成田(飛行機)

TEL 0236-30-2208

④ 1978年 ネパール アイランドピーク
(6,119m) 隊長

1981年 ネパール ランタン・リ(7,205m)
隊長

⑤ 総括 渉外

副隊長:福山 佑(Tabashi Fukuyama)

隊員構成

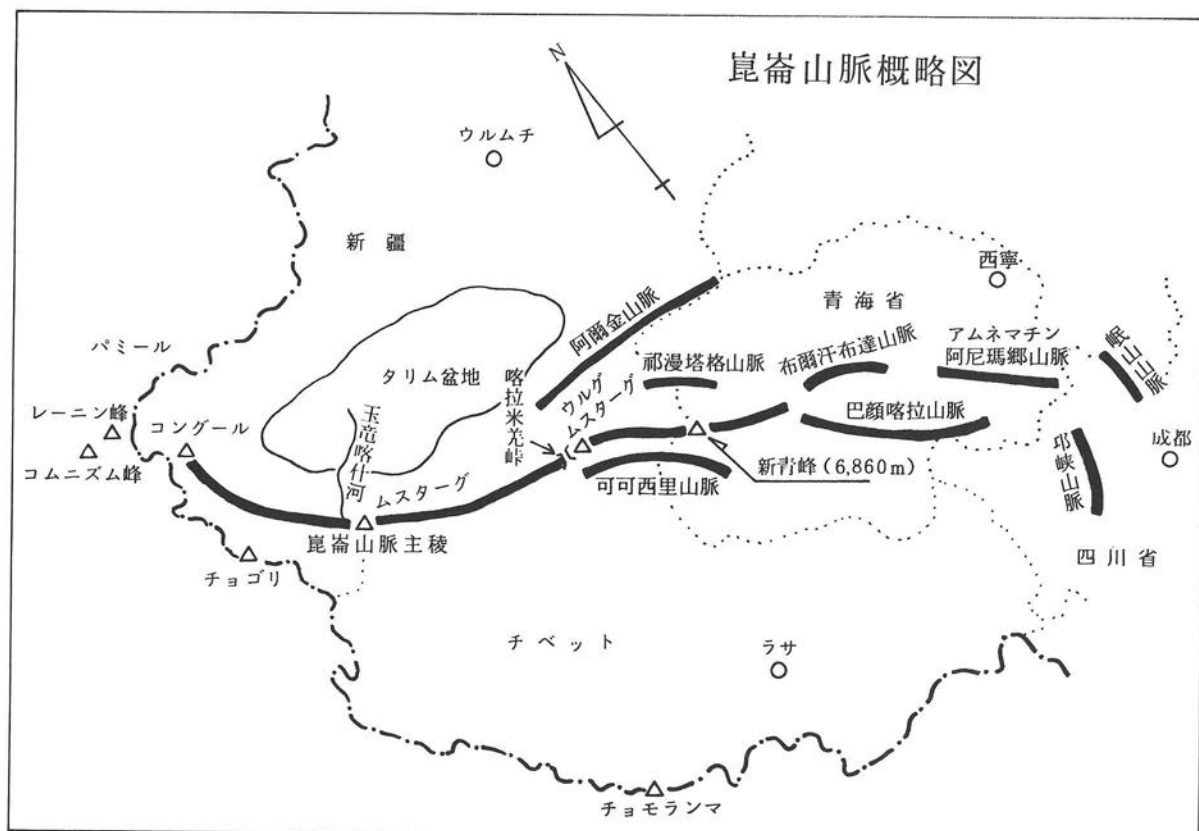
- | | | |
|---------|---------|--------|
| 1) 生年月日 | 2) 住所 | 3) 勤務先 |
| 4) 登山経歴 | 5) 隊の任務 | |

④ 1983~84年 中国 チョモランマ(8,848m)
1986年 中国 雪宝頂(5,588m)登頂

⑤ 登攀 報告書

隊員:森山 英穂(Hideo Moriyama)

崑崙山脈概略図



隊 員：増田 隆 (Takashi Masuda)

- ④ 1986年 南ア白峰三山縦走
1987年 明神V峰から主峰

- ⑤ 登攀 装備

隊 員：小玉 義広 (Yoshihiro Kodama)

- ④ 1986年 モンブラン

1986年 奥大日岳

- ⑤ 輸送 記録

隊 員：三浦 誠 (Makoto Miura)

- ④ 1987年 中国 青藏高原偵察隊

- ⑤ 登攀 食糧

隊 員：峯岸 一 (Hajime Minegishi)

- ④ 国内冬期登攀多数

- ⑤ 食糧 気象

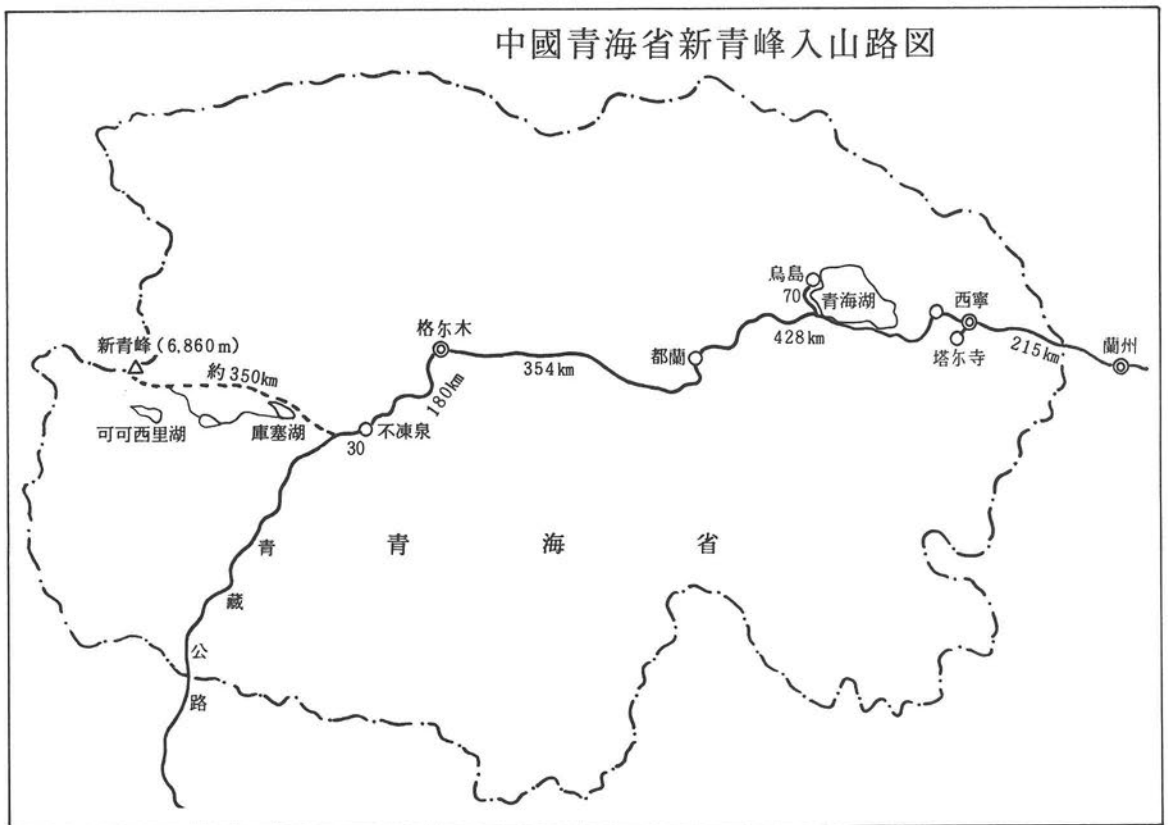
医 師：尾鷲 和也 (Kazuya Owashi)

- ④ 1985年 西大谷尾根～別山乗越

1986年 奥大日岳

- ⑤ 装備 輸送

- ⑤ 医療



青蔵高原偵察隊報告

1987年7月25日～8月25日

小 玉 義 広

新青峰への経緯

私達、山形県に在住する山ヤで新たな海外の山を目指そうと集ってから早、3年目が過ぎようとしている。当初はネパール又は中国の8,000 m級を目標に計画を進めていたのであるが、中核となったメンバーの辞退などからその計画は計画倒れに終わってしまった。

其の後、日本ヒマラヤ協会の紹介で中国の7,000 m近い未踏峰を山形隊で計画してはとの話があり、残ったメンバーで“やってみよう”と云う事になり、其の後、H A Jの方より中国登山協会との議定書等の煩雑な手続を交して頂き、一応の態勢はできた。

その山は、崑崙山脈の東に位置する新青峰(6,860 m)と云う山で、山に関しては一枚の写真すらな

く最終の都市、青海省の格爾木よりのアプローチも不明と云う状況で、直ぐに本隊ではあまりにもリスクが大きいと云う事もあり、今回は新青峰の周辺も含めての偵察隊派遣と云う事になった。又、偵察隊と共に5名のトレッキング隊が青海省の格爾木まで同行する事になり、7月25日に成田から9名で出発した。

以下、成田から青海省の格爾木までの日程は下記の通り。

7月25日 成田発10:00 (J L 781便)

北京着14:00

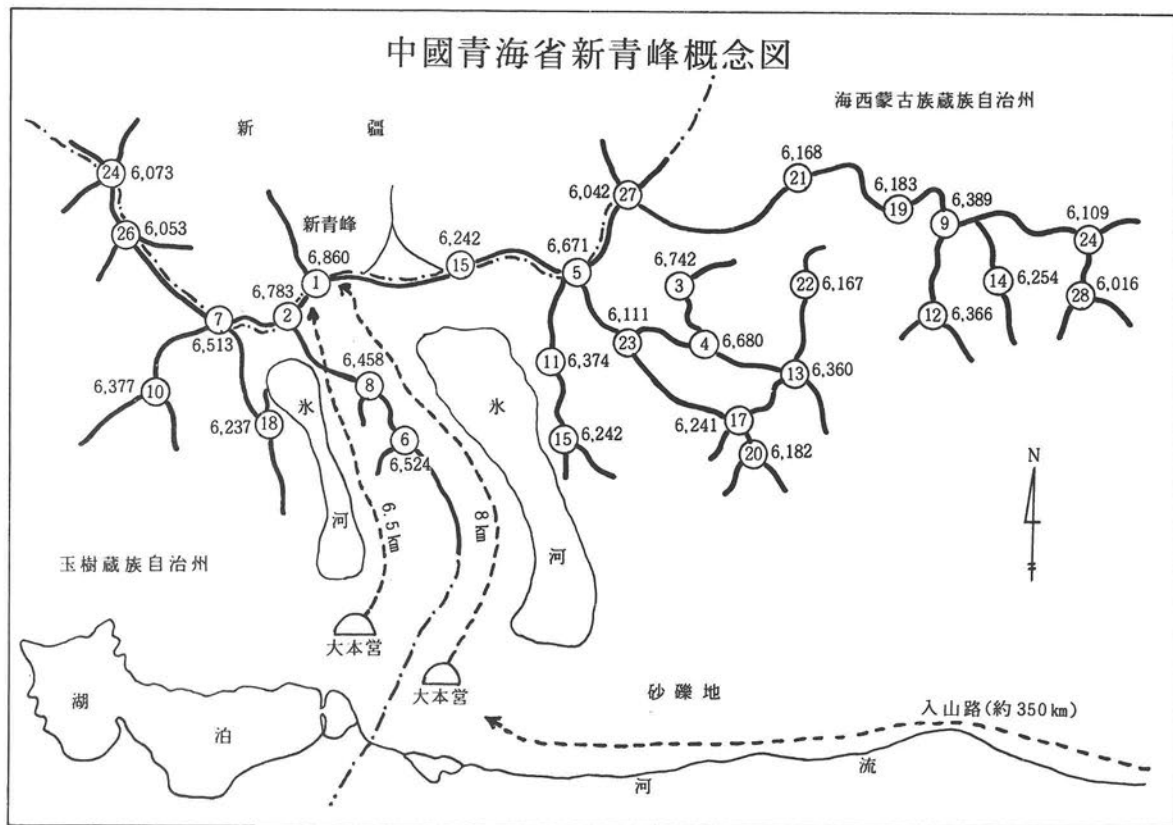
26日 北京～蘭州(飛行機、2時間15分)

27日 蘭州～西寧(汽車、4時間30分)

28日 西寧滞在

29日 西寧～都蘭

中國青海省新青峰概念図



30日 都蘭～格尔木

31日 格尔木滞在

8月1日 格尔木→不凍泉

午前6時に起床し、早めに朝食をとり8時30分に、いよいよ青藏高原へ向けて出発した。日本側7名、中国側から8名の計15名で、ジープ2台、小型ワゴン1台、トラック1台に分乗して今日の目的地、不凍泉を目指した。

格尔木周辺は、すべて砂漠となっており、その中に1本の舗装された道路がチベットのラサに延びているだけで、草木は殆ど無かった。

正午前に西大灘（シダタン）と云う所に着き、昼食をとる。標高4,100m、少し走るだけで息切れがし、高い所を実感する。夏だと云うのに気温は低く、みぞれが降りとても寒い。

再出発して1時間30分で崑崙山口に到着。標高4,750m。ウォーミングアップのために、直ぐ前の丘に登ってみる。高さは150m程か。殆ど牛歩並みの感じで登って行った。

ゆっくり下って、再度出発。3時半に不凍泉に着いた。標高4,600m。風が強く、非常に寒い所だ。ダウンジャケットは必需品である。

夕食は中国人スタッフが作った手料理が食べられ、ホテルの料理とは異なった味が楽しめ、明日からが楽しみだ。

日本と時差はないが、かなり西域にいるので午後9時でも空は明るい。午後11時に全員就寝。

8月2日 不凍泉

午前6時に起床。気持ちが悪く、テントから出て直ぐに吐いてしまう。隊長他1名も高度障害で苦しそうだ。ドクターの診察の結果、隊長は格尔木まで下ることになる。

この日は安全の為に1日停滞することにした。

8月3日 不凍泉→青藏高原

午前8時起床。テントの外は、雪が降ったらしく、薄ら白くなっている。相変らず風が強く寒い。

朝食を取る為に中国人スタッフのテントに入ると、熱いお茶が待っており、ホテルよりも快適な気分だ。中国では朝はおかゆと決まっているらしく日本から持参したふりかけが役に立つ。

9時35分、一路新青峰目指して出発した。2台のジープと4WDのトラックの順に高原を進んで

行く。遠くから見ると平坦に見えるが、実際はデコボコの連続で、朝食べた物が喉までもどりそうになるほどひどい。

この時期、高原は雨季の為、所々に雨水が小さな流れの溝を造っていて車の通行を妨げる。トラックが後輪をめり込ませてしまい、脱出に約1時間を費やす。

午後3時頃、左前方に湖が見えてきた。昼食を取る。バーナーでお湯を沸す。水は80℃位で沸騰する。午後5時15分、車を留め今日の幕営地とする。雷が鳴り、強い雨が降りだした。たちまち一面水浸しとなってしまった。

本日の走行距離130km。

8月4日

8時起床、頭もすっきりして、高度にもなれ、朝の食事がうまい。昨日の雨で表面が泥々になり、ジープもうまく走ってくれない。この先、トラックの走行は無理と判断し、2台のジープだけで出発する。1時間程進んだ所で、河が合流する所へ出てしまった。対岸へ渡らないと新青峰へは行けない。1台目が慎重に進むが、車輪がめり込みエンストしてしまう。自力脱出は無理で、ウィンチで引いてもらい脱出することが出来た。

計画段階では、このような大きな河があるとは判らず、この時期のキャラバンは不可能だ。日程や食糧から判断して、残念ではあったが、已む無く引き返す事にした。

今回はアプローチも含め、全体的な偵察が目的であったので、河の状況を見る事が出来ただけでもそれなりの意義はあったと思って、午後2時に連絡官と運転手の待つキャンプ地に戻った。

8月5日 キャンプ地へ西大灘（3,900m）

6日 西大灘～格尔木

7日 格尔木～都蘭

8日 都蘭～青海湖

9日 青海湖～上新庄郷SPA

10日 西寧滞在

12日 西寧～蘭州

13日 蘭州～北京

14日 北京滞在

15日 北京～成田

神の山 ゲニ峰

HAJゲニ峰登山隊'88年計画

趣 旨

日本ヒマラヤ協会は、広くヒマラヤ地域の登山・踏査・自然科学・人文科学について研究・実践する、ヒマラヤ愛好者約700名で構成する全国組織の任意団体であります。本会は、1967年の創立以来インド、アフガニスタン、ネパール、ソ連、パキスタン、ブータン、中華人民共和国等広大なユーラシア大陸を舞台とし、これまで登山・踏査だけでも60数隊を派遣し、数多くの成果を上げて参り、得られた情報の提供、研究の公表などにより、ヒマラヤを身近にするとともに、遭難防止対策にも尽力してまいりました。

本会の活動は、高所の困難な課題を目指す隊、未踏峰や未踏査の地域を目指す隊、豊かな旅を追求する隊等に大別されますが、わけても未踏への憧れは本会の活動の根幹を成すものであります。本会は、1983年以来中華人民共和国、チベット・新疆ウイグル・青海・雲南・四川省の各自治区と各省の広大な地域で登山と踏査を実施し、中国登山協会・各自治区・各省の登山協会と深い信頼関係を築いて参りました。そのような関係の中から今回も未踏峰の許可を得ることができました。

ゲニ峰は、川蔵公路が金沙江（揚子江）にさしかかる手前の理塘～巴塘間の南方に君主する白く輝く未踏の頂きであり、1986年に偵察隊を送り、翌1987年に登山を実施致しましたが、悪天候に阻まれ断念しました。帰路、再度登山協会に申請を

いたしましたところ、再許可を得ることが出来たので、今年、再度万全の態勢で臨みたい所存でございます。

私達は、今回も登山を通して、日中両国の親善に幾許かの役割を果たしたいと念願しております。

何卒、皆様方の暖かいご支援・ご協力を賜りたく、お願い申し上げます。

1988年2月

日本ヒマラヤ協会ゲニ峰登山隊1988

隊長 飛田和夫

計画の概要

1. 隊の名称

日本ヒマラヤ協会ゲニ峰登山隊1988年
(英文名) HAJ Mt.GENI EXPEDITION 1988
(略称) HGE-88

2. 派遣母体

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF
JAPAN (HAJ)

3. 目標の山

ゲニ峰(6,204m)未踏峰

4. 目的

- (1) ゲニ峰の初登頂
- (2) 中国登山協会・中国四川省登山協会との親善
- (3) 四川省の自然・民族・生活等の撮影

5. 登山期間

1988年5月20日～6月30日(42日間)

中華人民共和国

四川省成都市体育場路1号

6. 隊の構成

飛田和夫隊長以下 6名

中国側 3名 計9名

7. 推進の組織

日本ヒマラヤ協会ゲニ峰登山隊実行委員会
会 長 遠藤 登(HAJ会長代行)
実行委員長 稲田 定重(同 専務理事)
副実行委員長 飛田 和夫(登山隊隊長)
事務局 長 山森 欣一(HAJ事務局長)
実 行 委 員 尾形 好雄(同 常務理事)
八木原 明(同)
山田 昇(同)
登山隊々員

8. 隊の事務局(留守本部を兼ねる)

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1

淀橋食糧ビル506号

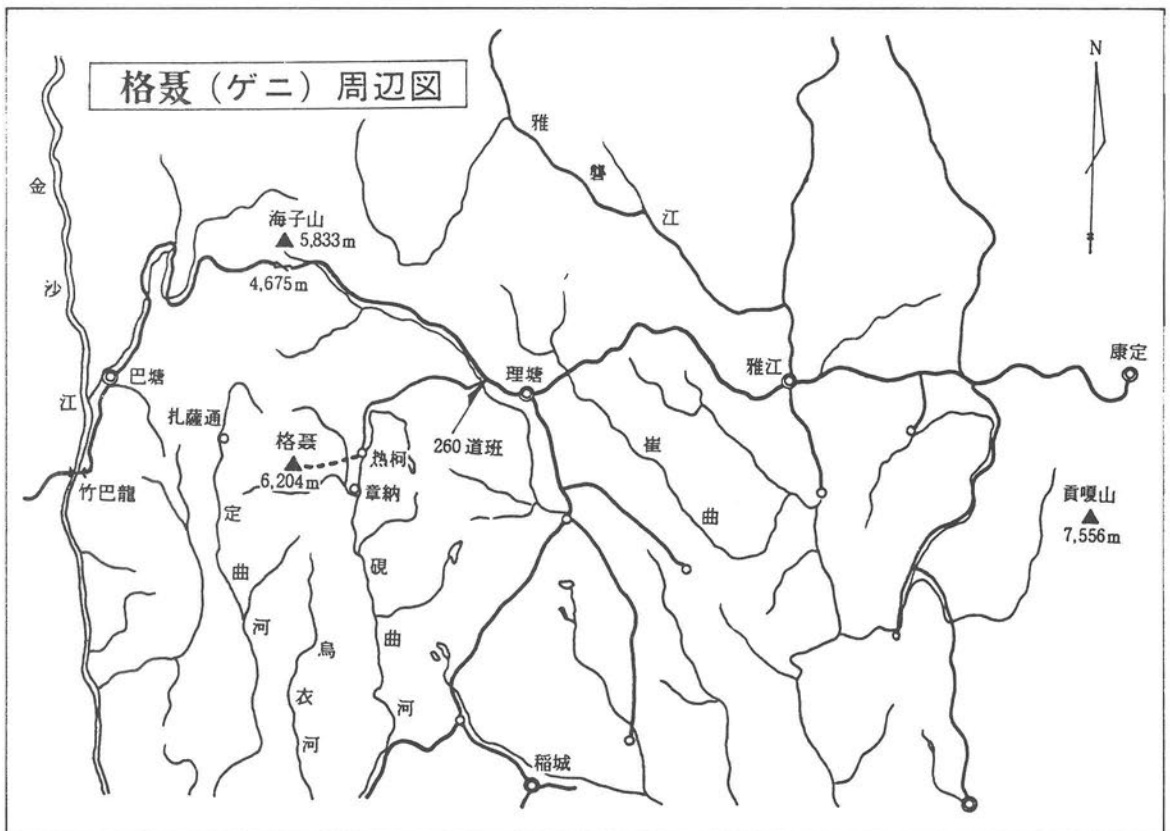
日本ヒマラヤ協会

9. 現地連絡先

四川省登山協会

日 程 概 要

5月20日(金)	成田→北京→成都(飛行機)
21日(土)	成都(出発準備)
22日(日)	成都→康定(ジープ) 370km
23日(月)	康定→雅安(ジープ) 284km
24日(火)	雅安→理塘(ジープ) 120km
25日(水)	理塘→熱柯(ジープ)
26日(木)	熱柯(高所順応行動)
27日(金)	熱柯→南達(キャラバン)
28日(土)	南達(偵察行動)
29日(日)	南達→BC(キャラバン)
30日(月)	BC整理
31日(火)	} 登山期間(20日間)
6月19日(土)	
20日(日)	BC撤収準備
21日(月)	BC→熱柯(キャラバン)
22日(火)	熱柯(隊荷整理)



23日(水) 熱柯→理塘(ジープ)
 24日(木) 理塘→康定(ジープ)
 25日(金) 康定→雅安(ジープ)
 26日(土) 雅安→成都(ジープ)
 27日(日) 成都
 28日(月) 成都→北京(飛行機)
 29日(火) 北京
 30日(水) 北京→成田(飛行機)

隊員構成

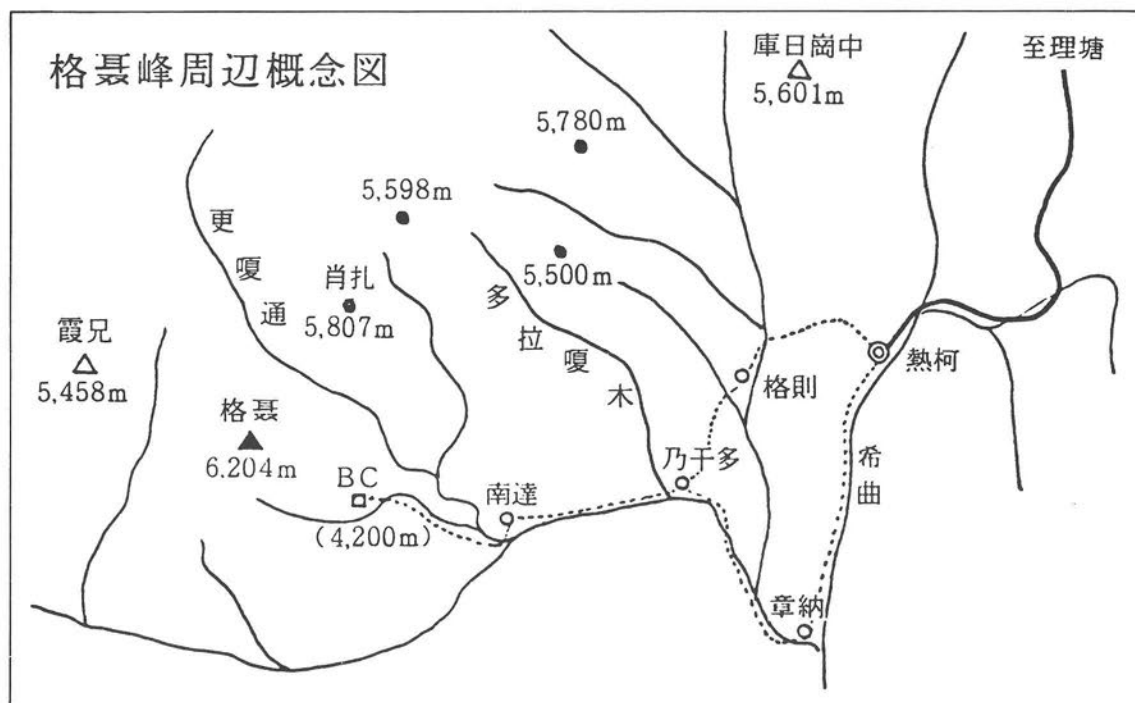
〔 1) 生年月日 2) 住所
 3) 勤務先 4) 海外登山経験 〕

隊長 飛田 和夫 (KAZUO TOBITA)

(8,505m) 登頂者
 1983年春 韓国 雪岳山
 1983年夏 インド ヌン(7,135m)隊長
 1984年春 中国 玉龍雪山(5,596m)
 隊長
 1985年夏 パキスタン K2(8,611m)隊長
 1986年冬 ネパール ゴーキョ・ピーク
 1986年秋 中国 ギャラ・ペリ
 (7,151m) 隊長
 1987年夏 中国 ゲニ(6,204m)隊長
 1987年～1988年
 冬 パキスタン バルトロ氷河偵察、隊長
 副隊長 伊藤 哲朗 (TETURO ITO)

4) 1976年夏 パキスタン カラコルム偵察
 1978年秋 インド トリスル(7,120m)
 登頂者
 1981年春 ネパール ヤルン・カン

4) 1987年夏 中国 ゲニ(6,206m)
 隊員 遠藤 京子 (KYOKO ENDO)



隊 員 寺沢 玲子 (REIKO TERASAWA)

4) 1968年夏 パキスタン イストル・オ・ナール(7,200m) 隊長、登頂者

1974年春 ネパール マナスル(8,156m) 総指揮

1981年夏 中国 ボゴダ(5,445m) 登攀隊長、初登頂者

1983年春 ネパール チャンラ(6,715m) 隊長

1984年春 中国 玉龍雪山(5,596m)

1985年秋 中国 クラウン(7,295m)

1986年春 アメリカ マッキンリー(6,196m) 副隊長、登頂者

1987年夏 中国 ゲニ(6,204m)

隊 員 天城 敏彦 (TAKAHIKO AMAGI)

4) 1980年春 ネパール アイランド・ピーク(6,189m)

1986年夏 インド キンナウル・カィラス(6,473m) 隊長

1987年夏 インド ヌン(7,135m)

隊 員 滝田 収 (OSAMU TAKITA)

隊 員 大野 邦晴 (KUNIHARU ONO)

4) 1983年夏 インド ヌン(7,135m)

1985年夏 中国 雪宝頂(5,588m) 登頂者

4) なし



残してしまった課題

1987年夏の記録より

飛田和夫

8月13日。午後になって風が強まり風と共に左右に揺れ動くテントの中で、シュラフに体を半分程つっこみ、視点の定まらないまに見上げていた。隣では同じ様な格好をしながらも読書に集中している娘。テントの上方四隅から取ってあるヒモに、ネックチーフ、手袋等掛けてあるが、テントが揺れ動く毎に、乱舞している。

視覚が定まらなくとも、頭の中がカラッポでも、唯、現実の結果だけは鮮明だった。ゲニ峰登山は終了し、「登れなかった」「敗退したのだ」と。

成都を発つ時より雨が降ったり、止んだり、晴れたりしつつも、BC付近からは完全に悪天候となり連日雨と雪が続き、C1での霧雨と濃霧が漂い視界が奪われた時などは魑魅魍魎の世界に引きずり込まれてしまったのでないかと、畏怖の念さえ感じるほどだった。が、天候にせよ、時期、期間等々が登山の結果におおきな要因として生じるのは明白だが、結果は歴然としていた。

何故、これ程までにゲニ峰の敗退が白紙同様の脳細胞をかけめぐるのでろうか。舞うネックチーフのごとく、心が揺れ動いた時機が計画の段階であったからだと自問自答する。

現在までの何回かの高所登山では、高さに関係なく全力を注いできたし、今回のゲニ峰も同様に

奮起していたが、転職と山関係の種々多忙が重なり、計画の進行、チームの育成、技術の向上とツアー的登山に絶対させない、更に、自の今後のいきさまのステップと私考していたにもかかわらず、軟弱さも加味され基本的行動が揺れ動いていた。

そんな時期、状況に機敏な先輩より、私の不安な行動について教示の暗示を受けるが、一度で気付くことが出来ず、「転職したから」「多忙だから」、そんなことは遠征に関係ない、事故が発生した際に「悔いのない応対が」「悔いのない処置が」。なにより「悔いのない登山が出来るか・・・」と激怒され、やっと隊の沈滞の原因に気付く醜態ぶりであった。

再度、以前の遠征の様に計画を遂行し実践したのだが、結果は悪天候だったとはいえ「敗退」で終わった。敗退を考えると、計画時での心の葛藤が台頭し、このことも原因の一つではなかったかと、揺れ動くネックチーフと同じ心境にさせられてしまった。

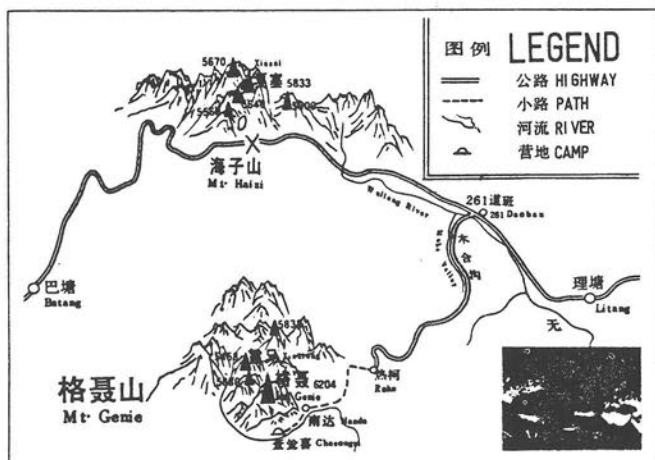
帰路、明年の許可取得をさせて頂いた。企画段階での重要性を持続させ、新たな再ステップの礎とする為にも、明年は「残してしまった課題」を解決したい。

格聂峰（ゲニ）概要

四川省の成都と西藏のラサを結ぶ川蔵公路（南路）の巴塘寄りに海子山塊の連峰が聳える。この海子山塊の南側に位置するのが格聂峰（ゲニ）である。

地元の人達が“神の山”と称する格聂峰は、公路からそれほど遠くない場所に位置しながら、これ迄全く知られざる山であった。周辺には数多くの5,000m級の山々が連なり、素晴らしい桃源郷をなしている。

登山基地となる理塘は、標高3,900mにあるこの付近最大の街である。



地域ニュース

《ネパール》

南隊の水腰医師急死

中国・日本・ネパール合同チョモランマ／サガルマータ友好登山隊に同行した南側隊のチーフ・ドクター、水腰英隆隊員（48）が、4月21日午前11時（現地時間）頃、ネパール側の南ベース・キャンプ（5,350 m）で、心臓発作のため急死した。

水腰ドクターは富山市民病院の救急センター部長兼手術管理科部長。文部省登山研修所専門調査委員でこれまでに'75年K6、'84年ガウリジャンカル等の遠征がある。

また、同日のネパール政府観光省の発表によると、4月18日にプモリ（7,161 m）の登頂に成功したアメリカ隊のクリスチャン・レイブンドガト隊員（27）が頂上で強風に見舞われ、行方不明になっているとの事。

《中国》

“シルクロード鉄道” 開通へ

シルクロードを通して、モスクワ経由で中国とヨーロッパを鉄道で結ぶ計画が、計画が立ち消えになってから30年余りを経て実現しようとしている。中国西北部の新疆ウィグル自治区で残された未開通部分（224 km）の工事が1990年を目標に進んでいるもので、これまでのシベリア鉄道より2,000 kmも距離が短縮される。貿易拡大と同時に、新しい観光ルートとしても期待がもてそうだ。然し、中ソ両国のレールの幅の違いや最近問題となっている中国側の鉄道近代化の遅れなど、“シル

クロード鉄道” 実現までには課題も多い。

4月17日付の中国英字紙チャイナ・ディリーによると、未開通のウス・アラ山峠（中ソ国境）間が開通し、シベリア鉄道と連絡されると、中国江蘇省の連雲港から、中央アジア経由で、ソ連、ポーランド、東独を通り、オランダのロッテルダム港に至り、黄海と北海が鉄路で結ばれる。

このシルクロード鉄道は、現在ある中国黒竜江省とモンゴル経由のシベリア鉄道、それにハルビン・沿海州間の貨物鉄道に続き、第4の中ソをつなぐ鉄道になる。建設計画は新中国成立後の中ソ友好時代に作られ、すでにソ連側も国境近くまでの建設を終えているが、50年代後半に中ソ対立が始まるとともに立ち消えになり、幻の鉄道となっていた。

中国は現在ある2つのシベリア鉄道によって、昨年も欧州向けに10万トンの製品、原材料を輸送している。それだけに従来のルートより約2,000 km短縮されるシルクロード鉄道は大きな魅力。新ルートはインド洋経由の海路に比べても約半分の距離で、輸送費の20%節約も可能と云う。また、シルクロードを鉄道で辿りたいと云う旅行マニアにも見逃せないルートになりそうだ。

これに対し、ソ連側はまだ明確な態度を表明していないが、在北京のソ連大使館は、来月に行なわれる中ソの経済協力に関する大臣クラス交渉で話し合われるだろうとしている。

ただ、今後の課題として中国の鉄道関係者が指適するのは、現在のシベリア鉄道と同様に中国とソ連のレール幅の違い。さらに、最近多発している中国の列車事故の背景にある、鉄道施設の老朽化と職務規律と維持管理能力の低さなども挙げている。

国際シルクロードラリー今秋開催

歴史のロマンにあふれた中国のシルクロードを舞台に、世界のドライバー、ライダーが技と体力を競う「第1回国際シルクロードラリー」が今秋、開催される事になった。

昨年春、世界で初めてオートバイによる北極点到達に成功したオフロード・ライダー風間深志さん（37）ら日本の冒険野郎と中国国際体育旅游公



司など中国側関係機関が協力して開催する大イベント。今年は日中平和友好条約締結10周年に当たり、関係者は「日中交流史に新たな1ページを加えたい。」と夢をふくらませている。

ラリーは、北京を起点に西安、蘭州、敦煌、ホータン、カシュガルなど、かつてのシルクロードの町を経て、新疆ウイグル自治区の首都ウルムチに至るルートで開かれ、全行程は約1万キロ。期間は10月末から11月中旬にかけての約20日間で、世界各地から最多で四輪車180台、トラック50台、二輪車120台の参加を予定している。

中国では85年から毎年、香港-北京ラリー(3,800 km、6日間)が開催されているが、今回のシルクロード・ラリーは規模、内容でそれをはるかに上回る。

コースの中で注目されるのは、敦煌以西のタクラマカン砂漠の南端を横断し、カシュガルへと至る区間。シルクロードの中で西域南道と呼ばれているルートで、つい最近まで一般外国人には開放されていなかった。所々にオアシスの町が点在するだけの乾燥した大地であり、過酷なラリーとして知られるパリ-ダカール・ラリーに勝るとも劣らない厳しいレースが歴史の道に展開されそうだ。

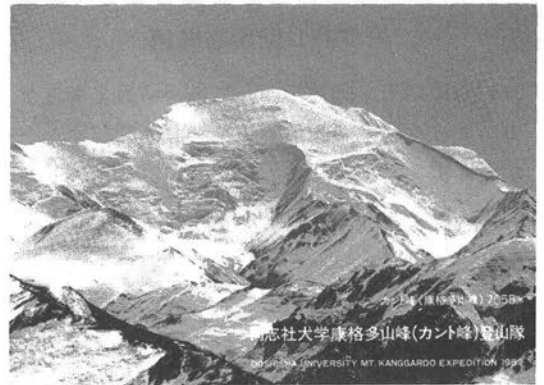
カント峰初登頂

インド国境に近い中国・チベット自治区山南地区錯那県に聳える未踏のカント峰(康格多山、7,055 m)に挑んでいた同志社大学登山隊(内野真一隊長ら18名)は3月24日に同峰の初登頂に成功した。

登頂は24日午後2時15分で、宮崎貴文隊員(35)と高野晃輔隊員(23)の2人で、26日には岩田喬隊員(27)、国久武揚隊員(20)と中国高所協力員のサナム・ツェリン氏(24)の3名も登頂に成功した。

同隊は2月10日に日本を出発して現地入りした後、ラサカから同峰北面のカタ(カ達)迄車で入り、3月5日にBC(4,700 m)を設営。その後、A・BC(5,300 m)、C1(6,100 m)、C2(6,700 m)と順次建設してアタックを敢行した。

一次アタックの宮崎、高野両隊員はアタック・キャンプのC2を午前7時45分に出発、強風と低温下の中を登り続けて6時間半後に同峰の初登頂



▲同志社大学が初登頂したカント峰
(Mt. Kangardo. 7,055 m)

に成功した。

同隊は、当初1987年秋に登山隊を派遣する予定であったが、中国側から中印国境付近の緊張を理由に受け入れ困難との通告を受け、延期になっていた。

チベット代表、中央政府非難 中国全人代

中国国営新華社通信が3月27日伝えたところによると、現在北京で開会中の第7期全国人民代表大会(全人代)第1回会議で、チベット自治区代表のドジェ・ツェリン同自治区主席は、チベット人及び他の少数民族に対する中国中央政府の政策を厳しく非難した。全人代で中央政府を公然と非難する発言が行われるのは極めて異例のこと。

ドジェ・ツェリン主席らのチベット代表は、チベット人にとっての特別の必要性を中央政府が無視していると非難し、政府はチベットの地理的、経済的な制約をないがしろにして、先進的な地域に対するのと同じ政策を押しつけており、これは「不公平だ」と手厳しく批判した。

一方、4月21日付の人民日報海外版によると、中国公安当局は、3月5日、チベット自治区ラサ市内で起ったデモで、武装警官1人を殺した学生ら4人を逮捕した。チベット大学生の他、チベット仏教学院生、個人経営店主、一般住民の4人で、同デモで逮捕者が伝えられたのは初めて。

《アフガニスタン》

ワハン回廊も撤退

1982年以来、国連の仲介で進められてきたアフガニスタン紛争の政治解決をめざす間接和平交渉が漸く実を結び、交渉当事国のアフガニスタン、パキスタン両国と“後見役”の米ソ両国各外相が4月14日午後2時30分（日本時間同日午後9時30分）からジュネーブの国連欧州本部「サル・ド・コンセイユ」で和平合意4文書調印式に臨み、それぞれ関係文書に署名した。

この歴史的和平協定の調印により、79年12月末に軍事介入し、国際世論の非難を浴びてきたソ連軍（約11万5千人）のアフガニスタン撤退が5月15日から開始される事が確定した。

このソ連軍のアフガニスタン撤退に関し、シェワルナゼ・ソ連外相は14日午後、ジュネーブのソ連代表部での記者会見の中で、「ソ連軍はワハン回廊からも撤退するのか」との質問に、「アフガン全域から撤退する」と言明。中国、パキスタンと国境を接する戦略的要衝の地であるワハン回廊からも撤退することを確認した。

《 ブータン 》

観光行政の縮少を通達

ブータン観光公社（Bhutan Tourism Corporation）は、外国人観光客のゾン、僧院等の見学制限に関するブータン王国政府の裁定及びブータン訪門者の受入れ縮少政策等について各国旅行関係業者に通達した。

ブータン観光は従来通り行われるが、見学の出来るゾン、僧院などは以下の通り。

○サムチ・ゾンカ

- 1) Samchi Lhakhang（僧侶の住居は駄目）
- 2) Gomtu Lhakhang

○チュカ・ゾンカ

- 1) Zangto Pelri Lhakhang（Phuntsholing）
- 2) Kharbandi Lhakhang（Phuntsholing）
- 3) Kamji Lhakhang（Phuntsoling）
- 4) Chasilakha Lhakhang（Bongo Block）
- 5) Chima Lhakhang（Chima Block）

6) Chapcha Dzong（Chapcha Block）

○ティンブー・ゾンカ

- 1) Tashichhodzong（但し、僧侶がブナカに居る場合のみ）
- 2) Thimphu Tshechu（お祭り時）
- 3) National Memorial Chorten
- 4) Changlimethang Lhakhang（Thimphu）
- 5) Jigmeling Lhakhang（Thimphu）

○パロ・ゾンカ

- 1) Poro Tshechu（お祭り時）
- 2) Ta-Dzong National Museum
- 3) Drugyal Dzong
- 4) Taktshang（下まで）
- 5) Bitekha Dzong（Haへの途上）

○ブナカ・ゾンカ

- 1) Punakha Dzong（但し、僧侶がティンブーに居る場合のみ）
- 2) Punakha Dromchen

○ウォンディフ・ゾンカ

- 1) Gangtey の風景観光と Black Necked Crane（僧院は駄目）
- 2) Wangdiphidrang Tshechu（お祭り時）

○トンサ・ゾンカ

- 1) Tongsa Tschechu（お祭り時）
- 2) Chendebji Chorten
- 3) Ta-Dzong

○ジャッカル・ゾンカ

- 1) Wangdichholing Dzong
- 2) Mambertsho
- 3) Peling Sermon Chorten（Palrithang）
- 4) Ura New Lhakhang

○モンガル・ゾンカ

- 1) Mongar Dzong

○タシガン・ゾンカ

- 1) Tashigana Tshechu（お祭り時）
- 2) Zangdog Palri（Kanglung）
- 3) Kanglung Lhakhang
- 4) Khaling Lhakhang
- 5) Radhi Lhakhang
- 6) Tashiyangtse Dzong
- 7) Mera Lhakhang

8) Sagteng Lhakhang

○サムドルップ・ジョンカル・ゾンカ

1) Zangdog Palri (Samdrup Jongkhar)

○ギャイレプー・ゾンカ

1) Tharpaling Monastery.

2) Nimalung Monastery.

3) Sershong Lhakhang.

4) Sarghang Lhakhang.

○チェリン・ゾンカ

1) Damphu Lhakhang.

2) Lami Dangra Lhakhang.

その他、インド人を除く外国人はインド・ルピーをブータンに持ち込む事は出来なくなった。外国人が支払い出来る外貨は、アメリカ・ドル、ポンド、ドイツ・マルク、日本円、スイス・フラン、フランス・フランの何れかに限られる。また、これらの外貨の両替はブータン政府公認の両替所でなされなければならない。

また、この縮少政策によってニューヨークのB T S (Bhutan Tourism Service) オフィスも閉鎖される事になり、今後の連絡は下記のBTCにする事。

Bhutan Tourism Corporation

P. O. Box 159

Thimphu,

Bhutan,

Phone : 2854, 2647, 2479

Cable : BHUTRISM

Telex : 0890-217-BTC TRU BT

トピックス

H A J 合同壮行会開催

H A J が此の春から夏にかけて派遣する中国・新青峰隊、中国・ゲニ峰隊、インド・リモ峰隊の3隊合同の壮行会が去る4月16日(土)夕、東京・池袋の東方会館で盛大に催された。

合同壮行会は主催者側を代表してH A J の遠藤登会長代行が挨拶を述べた後、来賓を代表して日本山岳協会の澤村幸蔵副会長より御祝辞を頂戴した。各隊の隊長から挨拶と隊員紹介があった後、

吉沢一郎氏のご発声で祝杯が上げられた。参加者は約160名。尚、各隊の出発は以下の通り。

○新青峰隊(植松秀之隊長ら8名) 4月22日

○ゲニ峰隊(飛田和夫隊長ら7名) 5月20日

○リモ峰隊(尾形好雄隊長ら7名) 6月5日

H A J 盛岡集会報告

冬期オリンピック誘致運動の熱気溢れる盛岡でヒマラヤ集会が3月27日(日)開かれた。午前の部は、岩手県山岳協会・山合光理事長の挨拶の後、岩手県人が参加されたヒマラヤ登山隊の中から、中国のチョー・ウィ、パキスタンのサラグラール、ネパールのパルチャモ、ラムジュン隊の報告がなされた。

午後の部は、東京から駆けつけた山森事務局長からヒマラヤの最近の情勢や高所登山の事故対策などについて説明があり散会した。参加者18名。

今回の集会は、地元の高橋亨夫評議員、佐々木正、小野寺光義会員の推進で実現したもので、関係各位に厚く御礼申し上げます。

エジンバラ公賞の受賞第一号

は沼田真教授に決定

エジンバラ公賞は、日本学士院名誉会員で自然保護に関心の深い英国エジンバラ公にちなみ、今年度、新設された。2年に1度、自然保護や種の保全の基礎になる学術成果をあげた学者が対象となる。

日本学士院(脇村義太郎院長代行)は3月14日、第1回日本学士院エジンバラ公賞を植物生態学の沼田真淑徳大学教授(千葉大名誉教授)に贈ることを決めた。

認められた業績は、応用生態学の基礎の確立。従来、植物生態学と云えば「人跡未踏の原生林」など、人間活動の及ばない自然を主な対象としてきた。それを180度転換したのが「沼田生態学」。対象は田畑の雑草や牧草地、竹林など人間と密接にかかわる身近な自然。雑草は田畑にしかはえず、休耕して放置するとやがて野草にとってかわられることや、家畜数が一定限度を超えると牧草地が裸地化することなど、自然の移り変わりや生態の

客観的データを作った。そして、人間にとって好ましい自然を保つために、自然の推移の段階や家畜の採食率などを総合評価して指数で表し、自然をコントロールする方法論を確立。

「自然を食いつぶせば、環境悪化のしっぺ返しを受けるのは人間。合理的に保護し、利用すべきです」と主張する。

沼田教授は、1963年に千葉大学山岳部を率いてヌンブル峰の初登頂に成功。以来10回、ヒマラヤの生態調査を行った。85年には東部ネパールの生態学的研究で秩父宮記念学術賞を受賞。

(ぬまた まこと)

茨城県土浦市生まれ。東京文理大卒。千葉大教授などを経て、日本生態学会長、日本自然保護協会理事長。70歳。

インド祭開幕

「ヒマラヤ」No.195～197号で3回に分けて紹介した「インド祭」の開会式が4月15日夕。東京・千代田区の国立劇場で行われた。開会式では、日本側のインド祭名誉総裁である竹下首相が「直接、インドの古い歴史や伝統、現代から未来へとつながる文化の息吹などに触れる絶好の機会であり、日本国民のインドに対する親近感も一層深まると確信する」と挨拶。続いてインド側名誉総裁のラジブ・ガンジー首相が「古い歴史的つながりのある日印両国が、この機会を通じて関係を再確認できるように望む」と述べ、文化交流の上で、インド祭が重要な役割を果たすようにとの期待を表明した。このあと、開会式記念公演として歌唱、太鼓演奏などが披露された。

インド四大舞踊開幕

4月15日から始まった「インド祭」参加行事の1つ、「インド四大舞踊公演」が16日夕、東京都千代田区の国立劇場で開幕した。約4千年前から伝わる伝統舞踊を中心に、インド各地から集められた。約50人から成る大チームで、これだけ本格的なインド舞踊公演は日本で初めて。

初日の舞台では、インド・ナンバーワンのダンサーと云われるマラビカ・サルカイさんの優雅で

神秘的なバラタナティウム、メーカーアップや動作が歌舞伎に似ているカタカリなど、エキゾチックな踊りが次々に披露され、観客を魅了した。

インド四大舞踊公演は、4月24日まで東京・国立劇場で開かれたあと、5月16日までの間に、名古屋、神戸、福岡、大阪、京都、奈良など全国各地で開催される。

問い合わせは、日本文化財団(03-580-0031)

インフォメーション

パキスタン北部の地図販売

パキスタン政府測量局発行の50万分の1地勢図、フンジェララブ峠、フンザ、ギルギット、スカルドゥ、ティリッチミール、ラワルピンディーなど8枚組が日本で入手出来ます。

頒価 6,000円(送料込み)

ご希望の方は、代金を郵便振替にて下記の口座に申し込む事。

郵便振替口座番号 横浜4-40297

加入者名 「広島三朗」

また、下記の日本パキスタン協会事務局でも直接販売しております。

東京都港区赤坂8-30-32 アジア会隊内

藤江幾太郎・山の画展

第33年を迎えた藤江画伯の山の画展が下記の通り開催されます。

今回は国内の山々、ネパールの外、沖縄旅行の取材作品等の新作が発表されます。

日時 7月1日(金)～7日(木)

11時～18時30分(但し、最終日は17時迄)

会場 朝日アートギャラリー

JR山手線有楽町駅/地下鉄丸ノ内線銀座駅C4出口、朝日旅行センター隣り
中央区銀座4-100

5月の東京集会は中止

5月の東京集会は、総会の為中止と致します。

UIAA 遠征委員会報告

UIAA (Union Internationale Des Association D'Alpinisme, 国際山岳協会連合) については、「ヒマラヤ」198号の“PEOPLE”の項でも若干紹介したので、此々ではヒマラヤ登山に関係のある遠征委員会 (Expedition Committee) の活動について、今年1月にフランスのシャモニーで開催された遠征委員会の報告から紹介してみよう。

1月23日(土)～24日(日)にシャモニーのフランス国立登山スキー学校 (Ecole Nationale de Ski et d'Alpinisme, 通称ENSA) で開催された遠征委員会には13ヶ国から17名が参加。日本からは日本山岳協会の神崎忠男 (海外委員長)、尾形好雄 (海外担当理事) の両名が出席した。

会議に先だち、ジャン・コードレイ委員長 (フランス) から、今回の遠征委員会では、前回 (1987年10月) モロッコのマラケシュの委員会で提議された事項について具体的な方法論を討議したいと挨拶があって会議日程に入った。

1. 遠征隊のマナーについて

前回の委員会で提議された遠征隊のマナー指導要項について具体的にどうするかを討議。

先ず、ジャン委員長から、スポーツ全般の問題としてマナーについては格付けをしていく必要があるのではなかろうか、遠征隊に関しては遠征委員会がラベル等で格付けをしていってはどうか、との提議がなされた。これに対して各委員からは様々な意見が出され、その主なものは以下の通り。

○マナーを押しつけるのではなく、マナーを守るような遠征隊を養成する事が必要なのではないか。

○マナーを守らせる機関としては、UIAAの加盟下部団体に任せるべきではないか。

○下部団体に任せると云ってもなかなか難しいので、マナーの悪い隊については罰則を検討してみたらどうか。

○どのように罰するかは難しい。マナーの悪かっ

た隊を発表する位しか出来ないのではないか。

○隊が守らなければならない事項を上げて、それらをいかに守らせるかを討議してみてもどうか。

○隊の出発前に遠征隊の遵守事項を表にしたものを各隊に送付し、それを守って貰うようにしてはどうか。

○マナーの格付けの方法として、各隊の環境保全、登山マナー等のアンケートを送付し、それを隊を組織した団体又は統轄する機関を通じて回収して、遠征委員会及びマナーを監督する機関で審査して格付けをしてはどうか。

○UIAAからアンケートを送って返事を待っても回収は難しいであろう。それよりも各ヒマラヤ諸国の関係機関に送って、そこで回収して貰ってはどうかだろうか。

○ラベルによる格付けをするには、ラベルの存在を各隊に知らせる必要がある。

○安全委員会のSマークは、今ではよく浸透している。従ってこのマナーのラベルも真剣にやれば2～3年の間に実行に移せるのではないか。

○今の遠征隊は、いかにスポンサーをみつけてお金を集めるかにばかり気を使って、登山の根本的なことが忘れられている。これは、一遠征隊ばかりでなくその上の団体にもよく戒める必要がある。

以上のような討議を踏まえて提示されたのが、別紙の「遠征における道徳規定」である。

2. アルパイン・スタイル及びライト・エクスペディションの定義について

ジャン委員長から、最近、山岳雑誌や新聞等でこれらの用語が頻繁に用いられるが、その定義がまちまちで明確でないために真実で正確な報告が伝わりにくくなっている。登山がいかに実行されたかをハッキリさせ、登山者が情報を正しく判断できるようにするためにもこれらの用語をきちんと定義づける必要がある。そして、この定義づけの目的は、決して登山者を不可能なものに挑戦させたり、山に於ける競争を激化させるためのものではない。との提議がなされた後、各委員から意見が出された。

○少人数遠征隊、アルパイン・スタイルの定義づけする際にベースキャンプに用意した医療用酸素を含めて酸素の問題はどうするのか。

○無酸素登山についてであるが、或る隊の報告に登山活動の初期の段階にベースキャンプで病気のため酸素を吸った隊員が、回復後、無酸素アルパイン・スタイルで登った。とあったが、こう云うのは無酸素登山と云えるのか。

○少人数遠征隊の場合は、酸素レスのパーティが多い。

○大きな遠征隊に比べて少人数の遠征隊は、人も物質も少ないためヒマラヤ諸国への医療活動などはできないが、だからと云って少人数遠征隊をせめるような事があってはいけない。

アルパイン・スタイル、無酸素登山、ライト・エクスペディションの定義については様々な意見が出されてまとまらず、委員長が問題を整理して後日、文書で連絡し検討する事になった。

別紙、「アルパイン・スタイル及びライト・エクスペディションの定義」は1985年に遠征委員会で作案されたものである。

3. 遠征隊にインフォメーションを与える仕事について

ジャン委員長から、カトマンズなどのヒマラヤの玄関口にUIAAの駐在員を置いて、各遠征隊からのレポート収集や行政機関からの情報収集を迅速くして各国の遠征隊にインフォメーションを流すような便宜を図ってはどうか、の提案がなされた。

○駐在員を置く場合の費用と人の問題はどうか

のか、やって貰える人のあてはあるのか。

○駐在員の候補者は何人居る。

○若い少人数の隊にも規則の変更等をきちんと伝わるようにインフォメーションを流してやりたい。

○遠征委員会がインフォメーション・センターとしての役割を果たすことを未加盟団体にも知らしめて協力を仰ぎ、また、余り活動的でないメンバーにももっと積極的に協力して貰うようにすれば、インフォメーション・センターとして機能するのではないか。

4. 訪問するヒマラヤ諸国との関係について

マラケシュの委員会で「登山規則改正等の情報収集を素早くすべきではないか」との提案に対して、あの後直ぐにネパール、パキスタン、インド、中国などのUIAAメンバーに手紙を出して、登山規則改正等があったから迅速くUIAAに連絡して貰いたい旨を連絡したが、どこからも返事はなかった。との経過報告が委員長からなされた。

○手紙の送付先が、ヒマラヤ諸国のUIAAメンバーとの事だが、登山規則の改正等は政府関係機関が窓口なので、観光省などの政府機関へ協力要請をしてはどうか。

○派遣する遠征隊のマナーを確立して送り出してやる。派遣する遠征隊に「カトマンズ宣言」を渡して遵守するようになっているが、各国では行っているか。

○その国のルールを守る事は絶対的な事である。

○大きな遠征隊にしるアルパイン・スタイルによる小さな遠征隊にしる地元の人を大切にすると云う事を忘れてはならない。

○ヒマラヤ諸国への要望があれば、それは規則の改正と一緒に委員会に文書で提出する事。

○ポーターなど現地雇用者に関する保険について各国の現状を知りたい。

何れにしる文化・教育面等を助けながらヒマラヤ諸国への援助をどうすべきかもっと討議されるべきである。

5. UIAAによるクリーニング遠征について

委員長から、マラケシュでも話されたクリーニ

ング遠征について具体案を討議して貰いたいと述べられる。

○実施するには、資金面が一番の問題である。

○現地の人と欧米人の編成によるクリーニング遠征隊にすれば、スポンサーが得られるのではないか。

○過去にアメリカと日本からエベレストのクリーニング遠征隊が出たことがあったが、あれはエベレストの許可取得のためのものであった。

○U I A Aで行う場合は、そう言う事はしないからスポンサーもみつかるのではないか。

○現地の人に頼んでやって貰ってはどうか。

○現地の人にお金を渡してやらせるのは、無駄。お金の行きどころが判らなくなる。

○U I A Aから1人だけ現地に派遣して、現地のお金と人を使ってやらせてはどうか。

○隊の大きさと汚染の度合は語れない。要はその隊のモラルの問題である。大きな隊でも隊員各位のモラルがしっかりしていればゴミは残こされない。

○ゴミの片付け方方法として、燃やすだけでなくもっと別にきれいに片付ける方法があるのではないか。

○高所キャンプでは、燃すか降ろすしかない。

○フィックス・ロープなどは残っていて助かる事もある。

○こう言う問題は、何らかのアクションを起こさない限り、前に進まないでマス・メディアなどを通じてアピールしていく必要がある。

何れにせよ誰かが中心になって進める者が居れば実行したいが、資金面で難しいと云うのであれば、この件に関してはペンディングにしておきたい。

この他、遠征委員会では○U I A Aによる若いヒマラヤニストの養成について。○遠征隊からのレポート収集について。○遠征委員会の内部規則の見直し。などに関しても討議を行ない2日間の日程を終了した。次回の遠征委員会は9月にカナダのバンフで開催される。

(文責：尾形好雄)

遠征における道徳規定

序文

1982.10.15, U I A A は、山岳活動に於いて、カトマンズ宣言の様々な原則を採択した。

この宣言は、特に山岳とその現地の人々及び彼らの環境の、保護に関する物である事を考慮に入れ、なおかつ、今日の遠征の発展を考えれば、その遠征の企画から終了まで隊員達によってとられる行動の規定を採用するのは、当を得た物のように思われる。

マラケシュでの総会に於ける、U I A Aの遠征委員会と指導者委員会は、提議の道徳規定について基本的な以下の事項を採択した。

U I A Aはその加盟団体のメンバーに、この規定を遠征に於いて尊重することを幅広く広めるように願う。

道徳規定

1. 遠征が行われる現地の国の、登山に対する規定を尊重する。
これは、遠征を行う当事者がその規定を知り、なおかつ実行出来る手段をもって出発すると言う意味である。
2. 1982年のカトマンズ宣言を尊重する。
3. 遠征のスポーツ面を、アルピニズムのより純粋な精神を通じて広める。
 - a. 近代ヒマラヤイズムに相応しい戦略と戦術をもって対応する。
 - b. 目的の山に合致する個人、団体、装備をよく検討し、目標に対し過剰な装備、資金を避ける。
 - c. いかに良い記録や成功を望むとしても、欺満の手段と同様にドラッグ、ドーピングの摂取は避ける。
4. どのような戦略、戦術が採られようとも、メンバー、特に現地メンバー（ポーター、ハイポーター、ベースキャンプ使用人）の健康、

安全を管理する政策を尊重する。

5. 現地の遠征メンバーの登山技術を向上させる為に、出来るだけ登山活動の技術面にも参加させる。
6. 遠征隊は、帰国次第に資料作成の為、真実で正確な報告や遠征中にあった問題及び得られた結果など全てのインホメーションを提出する。
7. 遠征に関する全ての報告及びマスコミとのコンタクトに於いては、特に宣伝の為に、それらを変形、誇張させてはならない。
8. 団結と相互援助は、同一の遠征隊員の間だけでなく現地の人々及び隣接の遠征隊との間にも存在する事を考慮する。
9. 隣接する他の遠征隊の所有になる装備を尊重し、断りなくそれらを使用しない。
10. カトマンス宣言の精神に於いて、遠征の終了には特にフィックス・ロープ、高所キャンプ、他を撤収し出来る限り山を清浄にする。
(1987.10.10, マラケシュ, U I A A 決議)

U I A A の関連組織によって、これから出発する遠征隊に以下のテキストが伝達される。

- 1) 1982年, カトマンス宣言
- 2) 遠征前アンケート
- 3) 遠征後アンケート

〔マウンテンウィルダネス〕 運動の目的

(Biella, 1987. 11. 1)

1. この運動は、それぞれの国に於いて登山、自然保護に興味を示す各団体に関連するもので、以下の目的を持つ。
 - a) ウィルダネスの精神に戻ると言う方向での、登山文化の変革を促すものである。コマーシャリズム、節操のない商業主義との闘い。学校での青少年の情操教育の促進。ガイド、登山リーダー、トレッキング企画者にエコロジーと言う觀念の創造。
 - b) これらの団体が、ウィルダネスの精神と

相容れないイニシアティブを授受しようとする時、山での環境保護の領域に於いて、彼ら（ガイド、登山リーダー、等）の活動をより明確かつ有効にする。

2. この運動の最重要な部分は、以下の如くの提案とイニシアティブである。
 - a) 「登山公園」又は、まだウィルダネスを保護、それを取り戻す事の出来る地域での「保護ゾーン」の設定の提案と、その可能性の追求。
(モンブラン、インターナショナルパーク、ホーヘンタウエルン国立公園、その他ドロミテの荒らされていない地域)
 - b) アルパイン・スタイル、ライト・エクスペンデション、ウルトラ・ライトエクスペンデションのヒマラヤ登山を促進する。規則を守らない遠征隊やトレッカーに対し厳しい罰則と共に、決められた場所にゴミを持って行く義務を設定する事を、現地政府に要求する。
3. この運動は、恒久的な活動として以下の事を進める。
 - a) ウィルダネスに相反する設備の撤去、設置の妨害。
例えば、バレーブランシュのロープウェイ、ベルモのサーキット、シャビエール氷河（ヴァノアズ）のスキー設備、サレーブの観光設備、イタリーアルプスの鉄道。
特にこの運動は、大変意義ある活動として、まず、バレーブランシュの設備の完全撤去を目標とする。
 - b) ウィルダネスそのものを取り戻す目的を持つ、遠征隊派遣組織を援助する。
(エベレストのサウスコル、K 2 のアブルツィ稜のフィックス・ロープ。)
4. この運動は、政府、国際機関の関連部門が必要な措置をとるように、その意義を理解させなければならない。
特に、政府、地方役所に対し法の名を持って、山での交通手段（飛行機、ヘリコプター、ジープ、オートバイ、スノーモービル、超軽飛行物）に対し、罰則とコントロールの機能を

持つ、厳しい規定を設定するよう要求しなければならない。

アルパイン・スタイル及びライト・エクスペディションの定義

山岳雑誌、新聞等に頻繁に使用されるこの言葉に対する定義が緊急に必要である。この定義を明確にする目的は、登山者をして不可能に挑戦させるものでなく、登山がいかに実行されたかをはっきりさせるものである。

それ故、山に於ける競争を激化させるものではなく、別の意味で登山のマナーの本質を示すものである。

以下の定義は、1985年4月28～30日の、SAD ABELLの委員会及び1985年10月10日、VENISE委員会のUIAAエクスペディション委員会でのUIAAの幹部によって提案されたものである。

〔アルパイン・スタイル登山〕

以下の如くアルパイン・スタイルを定義する。

- 1) 1～2パーティで実行されたもの。(最大6人の編成)
- 2) ベースキャンプより上部のルート工作は前もって何ものなされていないこと(高所キャンプ、デボ等)
- 3) フィックスロープを設置、利用しない事。
- 4) 登高、下降において他の人工的補助(ポーター、他の隊、等)を受けないこと。
- 5) 酸素ボンベを最初から携行せずに実行する。

〔ライト・エクスペディション〕

遠征において対象となる山にたいして基礎的な準備要因をより少なくしたものを、ライト・エクスペディションと定義する。とりわけ以下の要因が重要である。

- 1) アプローチではできるかぎり少ないポーターを使用する。

- 2) ポーターの使用はベースキャンプまでとする。(シェルパ、サポート隊、機械力、等も同様である。
- 3) 隊の編成は最大6名とする。
- 4) 酸素ボンベは医療目的以外は使用しない。

この領域に関してはあらゆる意味の解釈ができるので登山者は遠征報告においてはスポーツ精神にのっとり最も重要と思われる詳細を報告すべきである。

カトマンズ宣言

- 植物、動物の生態系及び天然資源の保護に努力し、山岳環境の保全につとめよう。
- 人間の登山行動による自然破壊を防止しよう。
- 地域の文化的遺産を尊重し、地元住民の尊厳を犯さないようにしよう。
- 自然の回復と復元活動を推進しよう。
- 各国の登山家が、友好と平和の精神で交流し、自然保護を促進しよう。
- 人間と環境の調和をはかり、そのために必要な情報と教育を相互に利用出来るようにしよう。
- エネルギーと廃棄物の処理に利用する技術は環境を破壊しないようにしよう。
- 環境保護に努力する山岳国の活動を発展させるために協力しよう。
- 政治的配慮によって、自由に登山出来る地域を広げよう。

一枚の写真から

山森 欣一

ここに一枚の写真を紹介する。昨冬惜しくもアンナプルナ南壁に眠ったヒマラヤニスト齊藤安平が撮影したものである。彼は、1986年秋ラブチェ・カンを偵察した。彼の慧眼により私達は昨年無事初登頂に成功したのである。

偵察の折、彼は巨大な氷河湖「錯朗瑪」の西にある6,140m峰に登りラブチェ・カンを偵察した。西にはシシャパンマとカン・ペン・チンを望むことができた。そして、シシャパンマの左手に屏風のように連らなっていたのがこの写真である。

東面から見たとてもめずらしいランタン〜ジュガールの山々であった。右手黒い部分がシシャパンマの南方にあるニャナン・リ(7,071m)の末端壁でありその南稜の一部がのぞいている。中央のどっしりとした山は、明大の田村宏明氏が1964年に単独登頂したペンタン・カルボ・リ(6,865m)であり、その手前にシシャパンマの東にあるポーラ・ガンチェン(7,661m)の南東にある6,126m峰である。

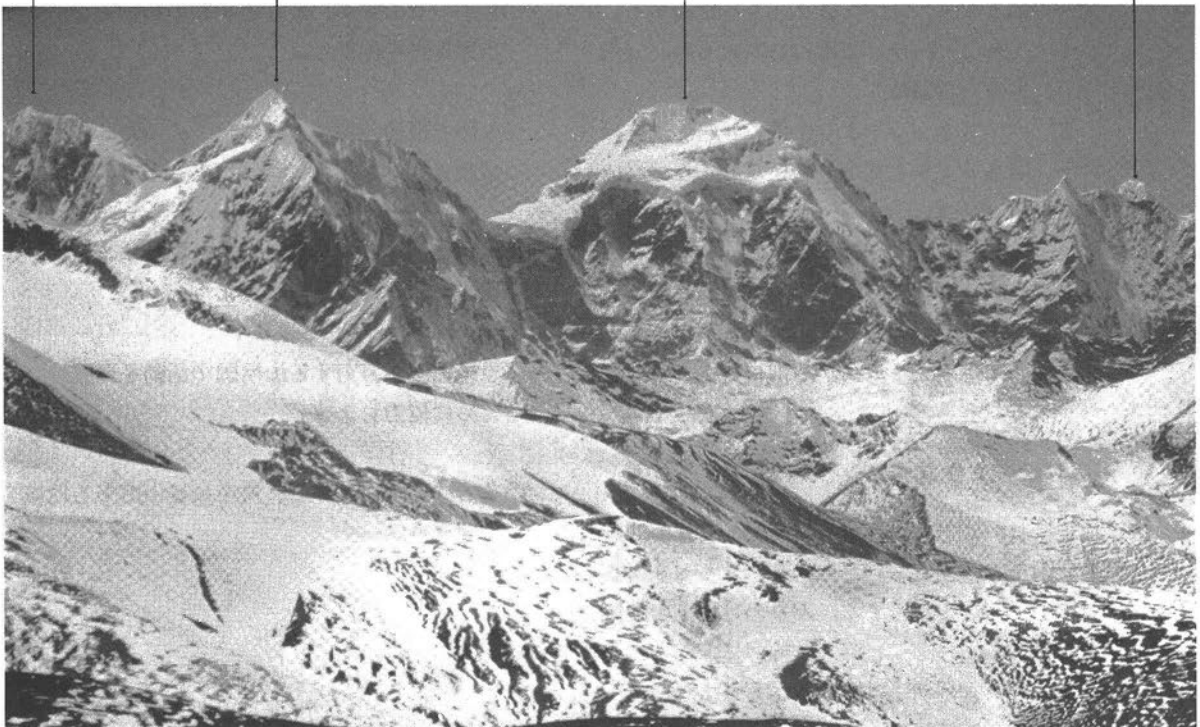
さて、このめずらしいランタン〜ジュガール山

ドルジェ・シクパ
6,966m

レンボ・ガン
6,979m

グル・カルボ・リ
6,891m

ランシサ・リ
6,427m



▲ランタン〜ジュガール山群東面〔偵察隊 6,140m峰から撮影〕

Panoramic Viewed of Langtang Himal
from Tibetan side

群の東面を見ながら山名を入れて見た。南(左手)から、ドルジェ・ラクパ(6,966m) レンポ・ガン(ビック・ホワイトピーク 6,979m) グル・カルポ・リ(6,891m) 突起(6,410m) 西から頭を出しているのはランシサ・リ(6,427m) ペンタン・カルポ・リ、無名峰(トライアングル 6,485m) 西から頭を出すのはランタン・リルン(7,234m) 後から大きな山が顔をのぞかせていて見づらいが手前にペンタン・リ(6,758m)と続いている。

さて、ペンタン・リの後に顔を出している大きな山は何であろうか。実は、既にご存知のとおりネパール政府は、1983年秋に山名の改定や、標高の改定などを行ったのである。(ヒマラヤ154号参照、岩と雪100号に薬師義美氏の解説あり)

その時期にDr. ハルカ・グリーン氏と R. K. シュレスタ氏によって、ネパール・ヒマラヤの6,000m以上のピーク1,310座がまとめられた。これは山名、標高、位置(数字)などが記入されている。

この表によれば、ランタン、ジュガール山群に

は、7,000mのピークであるランタン・リルン、ランタン・リ(7,205m 1981年H A J 初登頂)など6座を含めて90数座の6,000m以上のピークが列挙されている。そして指定された緯度、経度によってそれぞれのピークを配置してみると、このペンタン・リの後に顔を出している山の付近には、キュンカ・リやサムバチュムなどの約7,000mほどの標高を持つ山が存在しなければならないのであるが、ランタン氷河中流域の左岸には、キュンガ・リとして6,601m その北西に6,506m 峰があるだけなのである。

果してこれらの峰の標高は何によって得られたのであろうか。登山者としては是非知りたいところであるし、この大きな山がどれに該当するか知りたいものである。

尚、1982年には、イギリスのダグ・スコットらが、ニヤナン・プー氷河に入り、ニヤナン・リやシシャパンマ南壁を登っているの、ランタン、ジュガール山群を東面(中国側)から許可申請すればパーミッションを取得できるものと思われる。

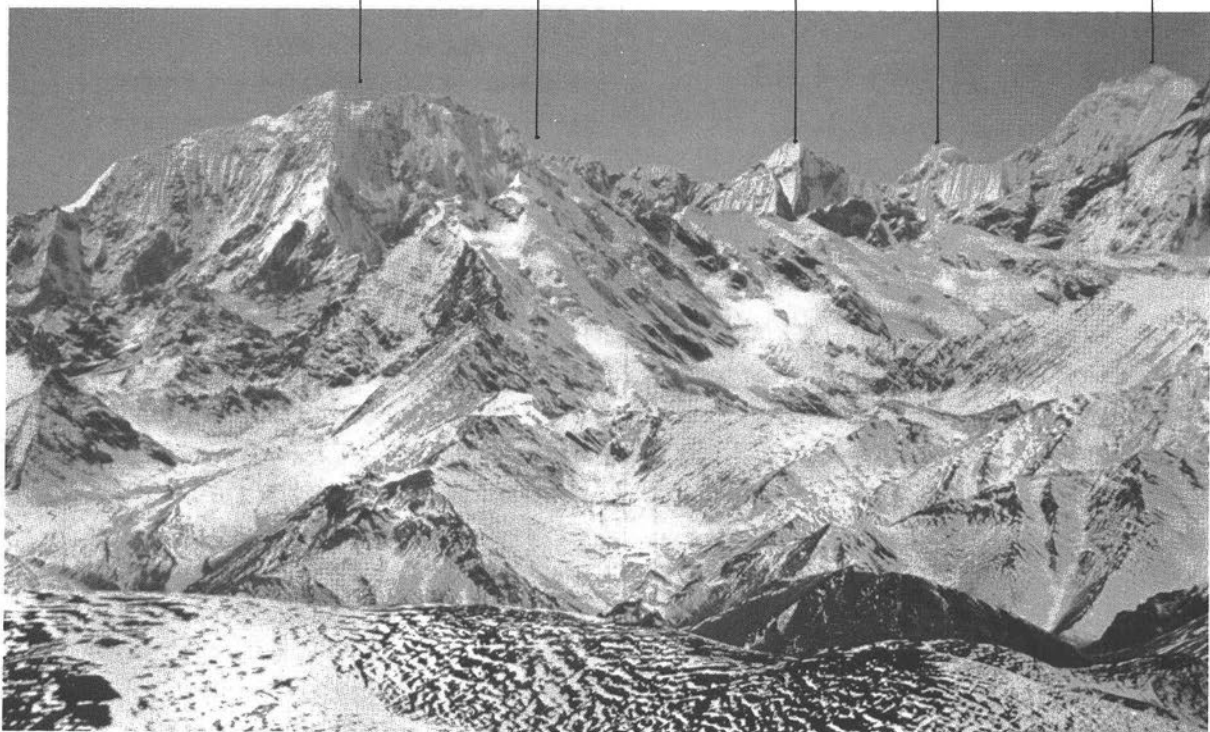
ペンタン・カルポ・リ
6,865m

6,126m 峰

(トライアングル) ランタン・リルン
6,485m

7,234m

キュンカ・リ



■ 寸 感 ■

先頃、ここ数年恒例行事となったH A J主催の合同壮行会が開催された。今年は、4月～6月にかけて出発する登山隊のため久々に桜の壮行会となった。

今回壮行された3隊は、何れも未踏峰への登山隊で例年の如く処女峰漁りに出かけるH A J隊に対し、会場では羨望と嫉妬の入り交った言葉で各隊員が激励されているのが見受けられた。

1988年の今日、このような未踏峰に相まみえる事が出来ると云うのは至上の喜びであり、そのチャンスが十分に生かされなければ、誠に勿体無いと云えよう。大体、今日まで未踏峰として残されてた玉峰は、その殆どが政治的理由から保護されてきた山である。従って唯一のチャンスをものにしないと再度処女のま相まみえる事は甚だ難しいと伝える。となると行く側としてはつつい肩に力が入って意気込んでしまうが、然し、それは人間側の勝手な云い分であって、自然界に太古の昔から峻立してきた山にとってははた迷惑な話であろう。力の次元が違う中で、己れの欲望だけしか見えなくなると時として悲劇がもたらされる。慎重かつ大胆な英断が必要ではなからうか。

■ 事 務 局 日 誌 (4月)

4日(月) リモ峰、GⅡ打ち合わせ

- 6日(水) CMAと協議の為、山森事務局長訪中。
- 7日(木) 事務局打ち合わせ(稲田、尾形)
- 8日(金) 山森事務局長帰国
- 12日(火) ゲニ峰打ち合わせ
- 15日(金) ヒマラヤNo.198発送
- 16日(土) H A J 合同家族会及び合同壮行会(東京・池袋)
- 17日(日) リモ峰打ち合わせ
- 18日(月) リモ峰打ち合わせ
- 20日(水) 来日中の四川省体育運動委員会副主任の陳保明氏と懇談(甲府・遠藤、山森)
- 22日(金) 新青峰隊出発(JL-781便)
- 25日(月) 東京集会(19名)

ヒマラヤNo.199(6月号)

昭和63年 5月10日印刷 63年 6月1日発行

発行人 遠藤 登
編集人 尾形 好雄
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号

—— 友好の白き頂 ——

ラプチェ・カン 7,367m

1987年初登頂の記録

チベット定日高原に聳える知られざる山、ラプチェ・カンは、H A Jと西藏登山協会の合同隊が初登頂に成功した。此の程、この日中友好の足跡を記した報告書が上梓された。チベット登山に興味のある人には必読の書と云えそうだ。尚、残部僅少はつきH A J会員のみに限定させて頂きます。

B5版、本文144ページ、口絵カラー写真4ページ、モノクロ写真23ページ他多数。

(頒 価) 3,000円(送料込み)

(連絡先) 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1

淀橋食糧ビル506 日本ヒマラヤ協会

—— インドヒマラヤの手引 ——

改訂版刊行 !!

H A Jの「インドヒマラヤの手引」は、インドヒマラヤのトラの巻として好評を得ておりますが、此の程、これ迄(第三版)の内容を大幅に変えて、改訂版として刊行致しました。

登山許可申請から遭難事故対策までインドヒマラヤのすべてが豊富な実例と共に盛り込まれております。また、付録にはインドヒマラヤの解禁峰一覧、地図、文献索引、登山規則等があります。

B5版 126ページ

(頒 価) 2,500円(送料250円)

(申込み先) 日本ヒマラヤ協会事務局まで

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-574-8880

三井航空サービス代理店2452号



遥かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5階 ☎03(237)1391(代表)
大阪営業所 〒541 大阪市東区平野町4-53-3 ニューライフ平野町202号室 ☎06(202)1391(代表)
カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING (P) Ltd. P. O. BOX 3017
KATHMANDU, NEPAL ☎221707
運輸大臣登録一般旅行業 607号

ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



ICI 石井スポーツ

- 登山本店／〒160東京都新宿区百人町2丁目2番3号 ☎03(208) 6601～3
- 大宮店／〒330埼玉県大宮市宮町2丁目123番地 ☎0486(41) 5707
- 水道橋登山店／〒101東京都千代田区三崎町2丁目8番14号 ☎03(264) 5575～6
- 神田登山店／〒101東京都千代田区神田神保町1丁目8番地 ☎03(295) 0622
- 新宿西口店／〒160東京都新宿区新宿1丁目16番7号 ☎03(346) 0301(代)
- 高崎店／〒370群馬県高崎市新町6番地 ☎0273(27) 2397(代)
- 札幌登山店／〒060北海道札幌市中央区南二条西4丁目4番 ☎011(222) 5305
- 新潟店／〒950新潟県新潟市東大通2丁目5番1号 ☎0252(43) 6330
- 仙台店／〒980宮城県仙台市東八番丁107番地の36号 ☎0222(97) 2442
- 町田ジョルナ店／〒194東京都町田市原町田6丁目6番地14号 ☎0427(26) 6248(代)
- フーズショップ／〒160東京都新宿区百人町2丁目2番43号 ☎03(232) 1286
- 外商部／〒160東京都新宿区大久保2丁目19番10号 ☎03(200) 7219
- 事務所／〒160東京都新宿区百人町1丁目4番15号 ☎03(200) 1004